

釣れ釣れなるままに

2014年思い出の釣行記 PART. 11

再び二兎を追う

鹿島釣狂



本日の釣果（出刃を入れたの二刀流）

岩見沢釣遊会第六回大会

平成二十六年度第六回大会が三石港～様似港の区間で十月十九日に開催された。大型台風十九号が北海道の温かな海を掻き回して魚の岸寄りが期待され、「とんとん会」からも六名の会員が参加してくれて盛況のうちに大会を迎えることが出来た。またこの日は、道釣

連の大会が東静内港～浦河港で実施されていたので、目指す釣り場が重なることを嫌って、浦河港より東に向かう会員が多かった。その中でも月寒は、昨年、佐々木清氏が48cmをはじめとする大物タカノハを爆釣したこともあり参加者六名が向かった。

私は、本日の釣り場は、幌島から月寒へと流すことにしていた。昨年、幌島に入ってハゴトコ二匹の釣果だったのだが、百mほど離れたところに入っていた御仁が早いうちからアブラコやカジカの大物をゲットしていたので、そこに入ろうと考えていたのだ。また、月寒は先に述べたように仲間の佐々木清氏が大物タカノハを揃えて優勝した場所なので、明けてからそのタカノハを狙おうと思ったのだ。月寒には一度も入った事が無いので、グーグルマップを検索してみると、ストリートビュー画面で旧浦河国道にも分け入って、海岸への下り口やその目標となる建物などを手に取るように伝えてくれた。また、幌島のバス停は、日高月寒、東月寒のバス停と同じようなモダンな造りになっていると思い込んでいたのだが、旧態依然とした赤茶けたトタン張りの古い造りのものだった。

そのおかげで、今回は、見間違ふことなく幌島のバス待合所で下りて、すぐに海岸に向かって狙いとして場所で荷物を下ろすことが出来た。周囲には誰もいない。ヘッドランプの灯りを消し、しばらく海岸を見つめてから一本を70mほど沖合の根を狙って遠投し、二本をゴロ天秤ネット仕掛けで中投、近投と振り込んだ。ハゴトコが竿を揺らしたがなかなか本命とするカジカやアブラコからの音沙汰がない。また、根掛かりも多く仕掛けをいくつも消耗してしまった。ようやく明け方近くになって、遠投していた竿に竿尻を持ち上げるよいアタリが出て、40cm強のカジカが上がった。それに続いて近投にもアタリが連続してカジカが六本になった。

次に向かう所は月寒だ。幌島から月寒方向を眺めると我が会とは別の釣り人も入ったらしく沢山のヘッドランプが点滅していた。そして、何か食いが立ってきていたので、このままアブラコ狙いで頑張った方がよいという思いと、一度決めたことだからその意思を貫こうという思いが交錯してしまった。その葛藤を振り切って六時に荷物を片付け、七時には月寒に着いた。

根境で竿を出していた御仁に声を掛けた。なんと医釣会の岩本満氏だった。昨年の大会で一緒に交縁会から岩本氏をはじめとして村岸、小野田、大内の四氏が月寒で展開していたのだ。そして、私が駆け付けた時には、そのうちの何人かが35cm程の審査基準をクリアーできるかどうかのタカノハをゲットしていた。基準に満たないものも何枚か釣り上げてはリリースを繰り返したらしい。

佐々木氏がコンクリート護岸に座り込んでいた。先着が竿を出していて、自分が狙った場所には入れなかったそうで、カンカイ四本の貧果に嘆いていた。私は、大タカノハはこの時間帯からでも必ずやってくると信じて、佐々木氏の隣で全てをオリジナルのタカノハ仕掛けで遠投した。そして、締め切り時間ギリギリまで粘ったが、佐々木氏のおこぼれに与ろうとした浅はかな思いに応えてくれるタカノハはいなかった。

月寒地区漁民センター前で佐々木氏と一緒にバスを待っていると、お地蔵さんが目に入

った。ああ、これだ。このお地蔵さんに手を合わせていなかったのだ。遅ればせながら次の機会の大漁を祈願して、立ててあった蝋燭に火をともし、丁重に頭を下げた



この次の機会に大漁を祈願させていただいたお地蔵様

優勝した山田氏は、暗いうちに、月寒界限では珍しい43.6cmの大物ソイをゲットしていた。夜が明けてからはしばらく音沙汰がなかったが、海水が透明度を増して根がはっきりしてきたので、そこを集中的に狙った。まずは雌の48.5cmの大物アブラコ、そしてそのつがいの雄が心中するかのように山田氏のエサに食いついてきたのだ。

身長優勝は、前野氏だった。写真でもわかるように産卵前の卵で、はち切れんばかりに膨らんだ腹ぼっけのアブラコ47.3cmだった。総合でも四位に当たる成績だった。前野氏と一緒に浜荻伏に入った嵐氏は、同じように大物アブラコ、カジカをごろっと揃えて三位に入賞した。流石に名人と言われただけの本領を發揮した。

準優勝は吉井氏だ。私が電話した四時頃は、「乳呑は非常に浅い。チビカジカにハゴトコばかりで全然だめだ。」とぼやいていたはずなのだが、47cmをはじめとする大物カジカに、嫁として最大級のギャを審査に提出した。このギャは釣遊会の歴代一位に当たる魚である。

私は辛うじて四位に食い込んだ。

さて、今年度の大会は後残すところ一回になった。年間優勝争いの方は、今回で他に三点の差をつけてトップに躍り出た吉井氏が順当なところだ。しかし、吉井氏が最終大会で四位以下に落ちてしまうと、岡、前野、嵐にひっくり返される際どい点数でもある。まあ、外野の私はその成り行きを楽しむことにしよう。



左から3位：嵐 光博、優勝：山田洋司、準優勝：吉井 博、身長優勝：前野達志

孫の手懐け作戦

私には二歳になったばかりの孫がいる。これから年老いていく自分がいつまでも元気で釣りを続けていけるという保証はない。息子や娘を釣り好きにすることは叶わなかったが、孫を釣り好きにするという望みは捨てていない。なんとか孫を味方につけて、孫と一緒に釣りを続けていきたいものだと思う。そのためにも、今から孫を手懐けようと考えている。

今年になって孫の喜ぶ顔が見たいと、春生りイチゴと四季生りイチゴの二種類を植えてみた。春生りイチゴはすぐに赤い実を付けたので、さっそく孫を畑に連れ出してイチゴを摘ませた。外の水道で洗って食べさせようとする、娘が丁寧に洗って欲しいと念を押した。完熟して実が軟らかいので表皮が破れてしまったが、孫は美味しそうに食べていた。

我が家の果物や野菜には農薬をかけていない。それで、虫食いがひどいのだ。イチゴが実をつけて赤くなり始めると、それを察知した虫たちがすぐに穴を開けてしまっていたのだ。ほうれん草などは、葉っぱに穴が開いたものがほとんどだ。それで若いうちに収穫し

て食べるようにしていた。

ひどいのはサクランボだ。品種はアメリカンチェリーで黒い実を付けるのだが、赤から黒へと完熟していくときに虫にやられる。地面から這い上がってきたアリンコが、開けた穴の周りに群がっている。名前のわからない小さな蜂がブンブンと飛び回っている。

このサクランボは息子や娘が小さい時に植えたもので、黒くたわわに実ったサクランボを摘んで食べさせた。二人とも喜んで食べていたのだが、ある時、娘がサクランボの中で蠢いている白い幼虫を見つけてしまったのだ。私は、虫が入るぐらいのサクランボが美味しいのだと話して聞かせたが、それ以来、息子や娘、そして女房までもがサクランボを食べようとはしない。農薬がごっそりかかった店頭のサクランボは食べるのに……。

そのサクランボを孫に食べさせようと、外皮に傷のないものを選んで摘んだ。一つずつ丁寧に確認しながら、傷が少しでもついた物は、虫が入っていることを前提として、下に落としていた。収穫は摘んだ五分の一ほどにしかならない。万が一虫が一匹でも入っていたら、孫が気付くよりも先に娘がギャーと叫んでしまうだろう。その娘の引き攣った姿を孫が見てしまっただけでは、今後、孫は我が家のサクランボには手を出さなくなるだろう。これには最善の注意を払わなくてはならない。

桃の木は植えて四年目になるのだが、今年は二十個ほどの実を付けた。虫が入らないようにと袋をかけて熟すのを待ったが、摘果が十分でなかったために小ぶりのものだった。しかし、それを孫がおいしそうに食べたのだ。来年は、摘果をきちんとして大きな桃にかぶり付く孫の姿を見てみたいものだと思う。

ポートランドのブドウの木も植え付けてから四年目になる。これも孫の為に袋をかけて大切に育てた。そして、秋には甘い実をいっぱいつけた。孫と一緒にポートランドを摘んで頬張った。一人で頬張るよりもうんと甘い味がした。

昨年、新たに巨峰を植えてみた。育て方が難しかったが、今年になってわずかに十房ほどの実を付けたのだ。袋をかけて大事にしてきたこともあって、大振りの見事な房に実った。それを孫の誕生会に持って行ったのだが、失敗作の様だった。酸っぱいばかりで甘みが薄かったのだ。みんなが辞退する中、それでも孫はぺろりと食べてしまった。来年はみんなに味わってもらえるように、堆肥に一工夫してみたい。さらに、今年の春には、デラウェアの苗を植えてある。秋には木がずいぶん大きくなったので、来年は可愛い実をつけるだろう。これも楽しみである。

孫に大根や人参の収穫体験をさせようと畑に連れ出した。小学一年生の国語の教材にある「大きなかぶ」をモチーフにして、大根を一緒に引っ張った。孫に大根の葉っぱを掴ませて「うんとこしょー、どっこいしょ。まだまだカブは抜けません。」とリズムに合わせて引っ張らせる。次に「うんとこしょー、どっこいしょ」と、私が大きな力を加えて引っ張って「やっとカブは抜けました」とやると、孫はケラケラと笑って「もう一回」と次の葉っぱに手を出す。これからもまだまだ大根は育って太くなると思っていたが、孫のなすがままで「うんとこしょー、どっこいしょ。」と、とうとう最後の一本まで抜いてしまった。

季節が移りかわった晩秋、孫が家の外に出たいと訴えた。身支度を整えて外に連れ出すと、公園ではなく畑に行こうとする。もう、ブドウはなくなると説明しても、やはり畑に向かう。孫がイチゴを見つけた。四季生りイチゴなので晩秋になっても花が咲き実を付けていたのだ。孫の為に植えたようなものだから、いつもは赤くなっても摘まないのだから、虫が少なくなった今は、イチゴがたわわに赤く実っていたのだ。

来年は、是非メロンやスイカにも挑戦してみたい。そして、キャベツに集った青虫をとらせて、釣りの手解きもしたいものだと考えている。まずは果物から手懐けて、孫を釣り好きにしようとする爺さん作戦を着々と敢行していくのだ。

札幌竿道会大会

十月二十六日、札幌竿道会の大会が千平～フンベで開催されると聞いて私は迷わず参加を申し込んだ。この区間には、岩見沢釣遊会に入会したての二十年前ほど前に、タカノハを釣りあげた境浜があるからだ。当時はたまたまそこにタカノハが通りかかり、未熟な私のエサに食いついてくれたという思いしかなかったのだが、最近ではかなりの実績をあげているタカノハ場と紹介され、一回の釣行で何枚ものタカノハが釣り上げられていたのだ。

最近開通した目黒トンネルを抜けたところで山田勲氏と共にバスから降りた。しかし、海を見ると3mにも達しようかという大波が幾重にも盛り上がっては寄せて来ている。天気予報では、1m～1.5mの波となっていたので、今日はタカノハを狙った釣りが出来ると踏んでいたのにこの有り様だ。それでも、すぐには諦めることはできずに、何とかならないものかと、砂浜に荷物を運んでしばらく様子を見ていた。

時々大きなうねりが打ち寄せてくるが、ダメで元々、試してみるだけ試してみようと思いついてきていない砂浜に三脚を立てた。そして、竿袋から竿を一本だけ取り出した。リュックから仕掛け入れを取り出して砂浜に置き一本バリ仕掛けを結んだ。砂浜に置いたエサバツカンからカツオのエサを取り出した。すると背後に波の気配が立ち込めたと思ったら、あっという間に砂浜を駆け上がってきた。三十分ほど海を眺めていたのだがその間にはなかった更に大きなうねりがやって来たらしい。砂浜に置いた仕掛け入れに海水が入った。流されてしまったビニルパックに入った仕掛け一つ一つを拾い集めた。竿袋にも海水が入った。用意し始めた一本の竿と共に海水の来ていない砂浜に運んだ。リュックが二十mほど流された。慌てて取りに行っても背後に運んだ。エサバツカンとは捜すが見当たらない。ああ、これで今日の釣りは終わってしまった。道具全てをさらに渚から一段高くなった草原に避難させてから捜し回った。砂浜に続く川を挟んで百mほど離れたところに白いものが見えた。私のエサバツカんだ。これで釣りが出来るとエッサホイサと避難場所に運んだ。

こんなひどい目にあってもやっぱり試すだけ試してみようと先程準備し始めた一本の振出竿を伸ばした。しかし、竿が伸びきらない。ジャリジャリと竿に砂が絡んでいるのだ。

幸い近くに川水が流れているのでそこで洗った。砂まみれのリールも洗った。しかし、竿に付いた砂は落とせても、竿の隙間に入った砂はどうしても取れない。竿尻に着いた下栓を取ってから洗おうとネジを回そうとするが外れない。しばらく手入れしていなかったので、錆びついて回らないのだ。こんな時に限ってそうなのだ。

砂が絡んで伸びきらない竿を手にして投げ込む態勢に入った。しかし、砂浜に立てたはずの竿立てがないのだ。やむなく竿を避難場所に置いてから捜すことにした。これはどうにも見つからなかった。流されてから時間が経ち過ぎて海の藻屑となってしまったのだろう。幸い私には予備の三脚がある。

こんな状態でも何とか一度だけでも竿を振ってみようと渾身の力を込めて遠投した。竿を手を持ちどんな塩梅かと確かめたが、すぐに三十号の三角鉛が流されて戻ってくる。これじゃやっているとられない。

今度ばかりは諦めた。荷物を担いで岬トンネルのデチャッキ付近で打てる場所はないかと、捜しに行った。南の方から寄せてくる波で、岬の右側にはさらに大きな波が打ち寄せていた。岬の左に付いた舟揚場の横のゴロタ場で山田氏が竿を出していた。全くアタリがないとのこと。やむなく舟揚場で竿を出すことにした。二年前に参加させていただいた「とんとん会」大会でも同じようなことがあった。この時は、今日よりもさらに怒涛の荒波を前にして、初めから諦めて舟揚場に逃げ込んで、四本のアカハラと一枚のタカノハで準優勝を果たしたのだ。確か九月のことだったと思う。

しかし、今度ばかりはアカハラを含めて全く魚がいなかった。九時半まで粘ったが竿を揺らしたのはたった一度きりで、それも20cmに満たないカジカだった。



夕日ではなく朝日だ。天気晴朗なれど波高し。

庶野漁港で審査が始まった。こんな荒れた海でも魚は提出された。入賞者のほとんどが音調津漁港に逃げ込んだ会員だった。ルベシベツ、モエケシやオリコマナイ方面から避難してきた会員で総勢十名以上が港の岸壁に並んだという。遠くは宝浜（オニ岩、夫婦岩、谷磯、黄金岬、赤岩）から十キロもある道程を歩いてきた強者もいたというから凄まじい。皆さん35cmほどのでっぴりと太ったカンカイとクロガシラを大釣りしてきた。しかし、優勝者は美島の湾洞から庶野漁港までの波の死んだところを釣り歩いた山田裕一会長だった。ただ一人カジカ、アブラコの数釣りをしてきたのだ。

新浜にあるラーメン店「100番」で「もう境浜には絶対入らない」と言ってしまった。いや、何事も三度という。私のことだから、性懲りもなくもう一度同じ失敗を繰り返してしまうのだろう。いやいや三度目の正直とも言うぞ・・・。



優勝した山田裕一氏の魚（美島の湾洞 庶野漁港の左 ツツミ 1582点）